【62】

氏　名（国籍）	李（い）　英和（よんふぁ）（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4525　号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**遠藤周作の文学とキリスト教** －インカルチュレーションと預言者性－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授		名　波　弘　彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	浜　名　恵　美
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	青　柳　悦　子
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	秋　山　　学
副　査	筑波大学准教授		小　松　建　男

論　文　の　内　容　の　要　旨

本論文は，遠藤周作のキリスト教文学を対象とし，そこに表わされている「インカルチュレーション」の概念と遠藤の「預言者性」について考察している。本論文の構成は，以下のとおりである。

序　章

第一章　「アデンまで」論――留学体験と疎外されるという絶望――

第二章　「母なるもの」論――交差する現在と過去――

第三章　『沈黙』論Ⅰ――普遍と個別の相克――

第四章　『沈黙』論Ⅱ――踏絵を踏むロドリゴ，あるいは＜知＞の超克――

第五章　『侍』論――日本人元修道士配置の戦略――

第六章　『深い河』論Ⅰ――ピエロのイメージをめぐって――

第七章　『深い河』論Ⅱ――受容するキリスト教から発信するキリスト教へ――

結　章

序章では，本論文の問題設定と目的，「インカルチュレーション」の定義，先行研究，論文構成などの概略がのべられている。

第一章では，自伝的色彩が濃く日記形式をとった，遠藤のキリスト教文学の第一作ともいえる小説「アデンまで」と，遠藤のフランス留学体験とを対比させながら，彼の作家としての出発点において，西欧キリスト教の「普遍」概念がどのように位置づけられていたかを考察している。

第二章では，『沈黙』において，遠藤は，従来のキリスト教の神概念とは異なり，キリストのあるべき姿として「母性的神」を提示したという立場から，その原型が何であったかを作品「母なるもの」を分析して追究している。納戸神と聖母像という〈母なるもの〉，これこそが，遠藤の信仰体験の原型であり，遠藤が試みたキリスト教の神概念をめぐる「インカルチュレーション」の原型であったとしている。

第三章と第四章は『沈黙』をとりあげ，宣教師ロドリゴが日本に潜伏し捕えられ，踏絵を踏むに至るまでを検討し，日本の人間・風土・社会秩序をみつめるロドリゴの眼差しと彼の踏絵の行為に焦点をあてて論述している。ロドリゴが，日本人キリスト教信徒の生命を救うために踏絵を踏むのは，彼が「母性的」な神を獲得するためであったとし，その神の概念は，「矛盾するものの一致」や「両性具有」という概念であり，『沈黙』はまさにロドリゴの行為をとおして，「インカルチュレーション」の内面化のプロセスを捉えようとしたという。

第五章は『侍』をとりあげ，遠藤がこの作品で，異文化に対するキリスト教布教の問題が植民地支配の論理と結びついていることを，主人公の侍の行状をとおして提示しているとしている。カトリック教会は，布教の名のもとにおこなった過ちに対して従来触れてこなかったが，2000年になって，ローマ法王ヨハネ・パウロニ世が，カトリック教会が過去に犯した過ちを認め謝罪したことを考慮すれば，それに先だって教会の過ちを告発した遠藤の先見性が高く評価されるという。

第六章では，『深い河』がとりあげられ，登場人物・美津子から「ピエロ」と呼ばれる大津に注目し，大津にみる道化性について，作中に言及されるピエロのイメージをルオーの絵画と関連させつつ考察している。大津は，ピエロや道化師の行状やイエスの生き方と重ねあわされ，そこには不条理が提示されているが，その不条理が現代人に希望を与えるという逆説があるとしている。大津は，時代が必要とするトリックスター，つまり，ヨーロッパ中心のキリスト教を超越せんとするトリックスターであると解釈し，大津のキリストの似姿は，教会に対する遠藤の預言的批判であり，新しいヴィジョンであるという。

第七章では，第六章に引き続き『深い河』がとりあげられ，第一章で析出された問題が，この『深い河』の中でどのように解決されているかが追究されている。日本に帰国せずインドへ赴き，そこで独自の宗教活動を展開する大津の姿をかいして，世界に開かれた教会とは，世界との乖離よりも世界と連帯していくこと，世界と一体化していくことによって，世界中の人々の悲しみと喜びを自らのものとして行く教会である，と遠藤は主張しているとしている。キリスト教のメッセージを各地の文化にもたらすのではなく，その地の文化のうちにキリストを発見して行くというのが「インカルチュレーション」神学であるので，『深い河』で遠藤は，カトリック教会が歩むべき新しいヴィジョンを提示したという。そして，そこに遠藤の先見性がみられるとしている。

結章では，論文全体の総括がおこなわれ，今後の課題についてのべられている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文では，遠藤の文学作品を，1966年に発表された『沈黙』を中心に3期にわけて考えている。『沈黙』以前を第1期，『沈黙』の時期を第2期，それ以後を第3期としている。第1期の遠藤は，実際に留学生として西欧に赴き，そこで西欧世界のキリスト教に内在する「普遍」という概念との衝突を体験したが，その体験が遠藤文学の「インカルチュレーション」実践の萌芽となっているという。第2期は，遠藤のキリスト教文学の思索期であり，この時期に「インカルチュレーション」の実践がなされているとする。この時期の遠藤は歴史小説という枠組みをとおして，現実に日本がキリスト教をどう受け入れたかについて思索を深め，その歴史への省察をかいして現在の日本とキリスト教の問題に取り組むための方策を示そうとしたという。『沈黙』以後の第3期は遠藤の円熟期で，この時期の遠藤は，歴史小説から再び同時代の日本人を題材にする小説に向かうようになる。そこにおいては，単に日本とキリスト教という領域にとどまらず，むしろ，非西欧的なキリスト教というテーマを世界全体に向かって発信せんとする姿勢がうかがわれるという。

本論文の著者には，遠藤周作が，信仰者と文学者という融合しにくい立場で苦悩しながら，自らのキリスト教文学をとおして，従来「普遍的」と考えられてきた西欧中心のキリスト教を問い直そうと試みたという

認識がまずある。遠藤のこのような試みは，日本文化の内側からキリスト教を見直し，キリスト教と日本文化との間の間断なき対話をとおしてなされたが，そこから遠藤が導き出したことは，「母性的」なキリストであったという。著者は，遠藤がこのキリストこそ本来あるべき姿であるとし，キリスト教が西欧以外の国々の文化に適合するプロセスを示唆しつつ，それぞれの固有文化の内側から現れるキリストを中心にした，キリスト教会の向かうべき姿を再構築しようとしたと解釈し，この試みは，カトリックで採用された「インカルチュレーション」の課題を先取りした遠藤の実践であったとしている。

本論文は，まず「インカルチュレーション」の概念を導入し，論全体のキーワードにしたことに特徴があり，遠藤がそれに向かって活動をおこなっていたことを，具体的な作品分析をかいして明確に解明している。また，著者は，遠藤のキリスト者としての作家活動を，世界に生きるキリスト者の使命的なものであるとし，これを「預言者性」と呼び，小説をその声であるとしているが，それを共感的に分析・評価したところに特色がある。著者が，遠藤を単に文学者にとどめなかったことは積極的に評価でき，それにより，先行研究より一歩踏み込んだ議論を展開することができた。

こうした充実した本論文ではあるが，惜しまれることがないわけではない。遠藤は，本論文がとりあげた作品だけでなく，キリスト教に直接かかわりのない作品も多数のこしている。そこに見られる遠藤の姿は，本論文が追究したキリスト教会改革者，あるいは予言者としての遠藤と，どのようにつながるのかなどの問題が扱われていない。この問題を追究していれば，より重層的な遠藤像が析出できたであろう。

とはいえ，このような課題は，著者の今後の研鑽に期待すべきことであり，本論文の目的は十分に達成されたといえる。本論文は，関連領域だけでなく，多くの各研究領域に対して，示唆するところが多いものと判断することができる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。